

暗く、ひやりとした狭い路を、二人の大学生が進んでいた。一步を踏むたびに音は反響し、パイプ内を流れる流体の音や、点在する制御盤の稼働音、どこか遠くで何かを打ち付ける金属音などと混ざり、闇の中へと収束していく。向かう通路の奥や、天井や側壁を照らしながら、懐中電灯の光が不規則に動き回る。地上の蒸し暑さから隔絶されたコンクリの床と壁は一直線に続いており、彼らが歩く横を通る配管や太いコード類が行く先は、暗闇に吸い込まれてしまい、見えない。「今歩いているのは、地上のキャンパスではどの辺りなんでしょうね」

季節に合わない冷気と地下特有の鮮度を欠いた空気に少し顔色の悪い聡志は、自分の前をかつかつと歩く神宮に聞いた。「ここはそう、平砂、いや追越宿舎の下かな」

まだ先ね、大丈夫天月君。神宮茜は一度立ち止まり、聡志を振り返った。もう十五分ほど、配管類が増えたり減ったり壁に消えたり分岐していったり程度しか景色の変化しない陰気な地下道を歩き続けていた。

薄手とはいえこの季節にレザー地のジャケット、ゴツめの靴。地下道探検に何がそんなに必要なのかと思わず問い質したくなる膨れたボストンを肩に提げ、眼鏡の奥で黒い瞳が天井に吊られた申し訳程度の電灯に光る。

「大丈夫ですが、この空気は、ちよつと」

うつすらとした黴と埃、錆の臭いが、ゴム管や機械類の排ガス由来の臭いに溶け出した、何とも言えない地下の空気は、所々にある換気扇がなければすぐ気分が悪くなりそうだ。

「僕達どこまで行くんですか、先輩」

「このまま医学エリアを抜けて、そうね、春日キャンパスの方まで」

迷いなく歩きながら、神宮は応えた。聡志と違い物珍しげに見回すでもなく、壁や天井を確認するかのように照らしながら進んでいる。

一学期末試験が近づいた六月中旬、神宮はサークルの後輩である聡志を誘った。ちよつと息抜きに、と言って誘われたそれは、カラオケでも筑波山登山でもなく、筑波大学地下に張り巡らされた地下道を探検しようというものだった。

「天月君、第四学群は知っているね」

地下道探検の目的を聞いたとき、神宮はそう切り出した。勿論、と聡志は応えた。神宮先輩が秘密めかした表情で真面目に聞くものだから、こちらも思わず緊張してくる。人もまばらになった昼下がりの三学粉クリである。

第四学群とは、筑波大生ならばその全てが知っているだろう、大学非公式の、所謂ネタとして語られる学群である。

筑波大学は第一から第三、医学、体育、芸術、国情（春日）とエリアが分類される。初期編成では第一が基礎、第二が応用、第三が発展の学問領域として構成された。では第四学群とは果たしてどこに端を発したのかというと、学群を最初に編成する際、構想としては存在していたらしい。しかし編成の結果専門学群と第一から第三のナンバリングされた学群

で収まってしまったため、第四学群は名前のみで実際には存在しない幻の学群となってしまった、ということだ。よって第四学群などというものはそもそも初めから存在せず、また第一から第三のナンバーも、学内の地区を言い表すのに便利であるため未だに使われているが、平成十九年度に学群が再編されてからは、公式には旧い呼び方となっている。

いつから、誰が言い出したのか判然としないが、実在しない筈の第四学群の噂話ネタ話は、大学非公認で大量に作られた。まことしやかに囁かれるそれらは、ネタものから真実味のあるもの、都市伝説からSFじみたものまで多岐に渡る。と、探せば探すだけそれこそピンから錐まで出てくるという程度は聡志は知っていた。

そして、実在すら怪しいというか存在しないであろう第四学群が存在するのが、筑波大学地下南北四キロの幹線を始めとし、合計十四キロの長さを誇る共同溝、所謂地下道だというのだ。

「でもね、これだけ学生の間浸透しているモノが、本当に只のネタなのかしらね」

面白いと思わない、と先輩は言った。

「存在しない筈の学群の話の振り撒き始め、大学全体に蔓延する。その実体は誰も知らず——当然架空の学組みだからね、しかしこれまた誰かがそこに編成された学群をつくり出し、大学本部から何を言われるでもなく私達はネタとしてそれを享受している」

勿論存在なんてしないから本部が何か言う訳はないんだけどねと、神宮は呟いた。

「——そして偶に武装した格好で学内のあちこちを歩く黒服や、『第四学群』の物々しい文字を見ても、私達はごく平然とそれを受け容れている。もし彼らの銃が玩具に似せて造られた実弾発射可能な代物だとしても、私達に見分けはつくのかしら」

聡志は段々と息が詰まるのを感じていた。蒔かれてしまった疑念の種は必ず一度発芽し、水と養分を求めて根を張り出す。情報を吸って成長した木は、なにを実らせるだろう。

聡志は一度、息を呑んだ。

「また一方で、途方も無い噂があるよね。エイリアンや敵国の襲撃時に大学キャンパスが巨大ロボに変形するのだ、除籍処分済の社会不適合化学生を積極的に引き入れて四学生を増やしているのだの、つくば時間って実際ちよつと時空歪んでるらしいのだの……ちよつとしたのから確かめる価値のあるもの、果ては国家機密レベルまで選り取り見取りよ」

暗くなり始めた空を見て、神宮は軽く息をついた。

「どこまでが真実なのかしらね——」

思い出しながら歩いていさせて、歩調が緩んでいたらしい。神宮は聡志から少し離れて先を歩いていた。

道は少し前に、斜め右に方向が変わった。基本的に一本道だが、時折なんとか人が通れそうな横穴が空いていたり、第○制御室と書かれた扉があるが、聡志の前を黙々と進む神宮は、それらを見向きもせず完全無視し、ひたすら歩きつめていた。

神宮と二人で地下道に入ると聞いたとき聡志は密かにこれ

はデートかと少し期待を持ったが、いざ入ってからは神宮が特にそういつた会話をしてくるでもなく、ただ暗く冷たく狭い(横はいい)になって進んだ場所もあった。通路を進むのみで、聡志はまた密かに落胆し始めていた。ついでに空気の悪さもあり、二重で気分が良くなかった。何故自分を誘ったのか先輩に聞いたところ、だつて一人じゃ怖いじゃない、とはぐらかすような回答を得たせいもあるかも知れなかった。

前方を見ると、少し離れてしまっていた神宮が立ち止まっていた。懐中電灯のスポットで壁の一点を照らしている。

「天月君、あつたわ」

神宮に追いついた聡志が見たのは、目立たない黒いスイッチボタンだった。コンクリの壁際を走る細めのパイプの裏明かりの影に入る位置にあるそれは、懐中電灯に照らされて不穏なものに見えた。

「今私達がいるのは、大体凶情エリアの真下なだけどね。ある知り合いからね、教えてもらったの——ここに、第四学群への入り口の一つが、あるつて」

慎重に、神宮は言った。わずかに顔が引きつっている。その笑いは恐れか、歓喜か、聡志には分からなかった。

「本当にあるとは思わなかったわ」

神宮はスイッチに手を伸ばしていた。黒い、丸い、何一つ変哲のない、普通の、埃一つついていないそれに。

「待ってください」

聡志は神宮を制していた。ここで押して、何が起こるかは分からないのだ。

「それを押した先に、もし本当に第四学群があつたとして、行くつもりですか」

神宮の指がピクリと動いた。目だけでこちらを捉える。

「折角だし、行ってみてもいいんじゃないかしら」

「何かあるか分からなくても、ですか」

神宮の手は、どちらへも動かない。

「それは心配なのかな、それとも心配してくれてるのかしら。やだな、何を本気になつてるの」

第四学群は存在しない学群よ。神宮は平坦に言つてのけた。

「だからこれは、押してみるだけ。押してみるまでに、一体押したら何が起こってしまうのか、胸いっぱい夢を膨らませて想像して楽しむ、只のゲームよ」

うっとり——聡志にはそう見えた、神宮茜はスイッチを見つめた。

「じゃあ、そのスイッチがもし、ネットワークや電気系統のスイッチで、押したら停電とか起きたら」

「何か起こった場合どうするんですか逃げるんですか。そう言い終える前に神宮は応えた。

「そんな大事なものがここにあるわけないでしょ。多分こんな、間違つて付けちゃったか、誰かがそれこそネタとして付けたか、そんなものよ。実際、第四学群の案内板なんてのも作られてるし、ね。大体誰がこんな押しづらい見つけにくいところに実用のスイッチを付けるのよ」

聡志には神宮を止められそうになかった。どう言おうがそもそもネタなのであり、ネタ以上でないと返されればどうしようもないのだ。

「それは……いえ、でも止めましょう先輩。スイッチなんて大体押したら何か起こるんですよ」

それでも聡志は、不気味に照らされるスイッチを見て、神宮を止めようとした。

思えばこの時、もつと距離を詰めて——手を掴んでスイッチから引き剥がすでも逃げるでも可能なようにだ、おくべきだつたと聡志は後悔することになる。

「時に天月君、あなたは真面目な学生かしら」

神宮茜はふらりとそう質問をした。

「え」

なんだ、なぜ、そう頭の中で言葉が組み立てられたときには、神宮は言葉を継いでいた。

「私は只の興味が湧くと熱心に調べ物をする真面目な学生よ」それと同時に、ダン、と音を立て、握られていた拳が、黒いスイッチを押してしまっていた。